

玉置真吉研究

—日本の社交ダンスにおける イングリッシュ・スタイルの導入を中心に—

跡見学園女子大学短期大学部 園部真里

Ⅰ. 研究目的及び方法

日本では鹿鳴館時代以降も欧米の留学からの帰国者が各自社交ダンスを教え、様々な技法が混在していたが、現在の日本の社交ダンスの標準はイングリッシュ・スタイルである。それは玉置真吉(1885—1970)の貢献したところが大きい。

そこで本研究では玉置真吉を対象とし、どのように玉置は日本の社交ダンスにイングリッシュ・スタイルを導入し、普及していったのかを玉置式教育体系の成立過程、特徴を中心に明らかにすることを目的とする。

方法として玉置真吉の自伝、著書48冊、雑誌記事171件を中心とした文献研究により進めていく。

Ⅱ. 結果及び考察

(1) 玉置式社交ダンス教育体系の成立過程

イングリッシュ・スタイルとは、英国で1924年に発足したISTD (Imperial Society of Teachers of Dancing)のボールルーム部門の委員会のもとで標準化された技法である。玉置は1928年以降この英国の技法を知り、翻訳し、改訂を重ね、導入した。玉置は、日本に紹介されていなかったイングリッシュ・スタイルの社交ダンスを踊るために、基礎練習の必要性を感じ、まず最初に独自の基礎練習を考案した。

第1段階 玉置の初出版の書籍『社交ダンスの仕方』(1928)では、足のポジション、オープンターン、ステップの基礎練習であり、フォックス・トロット、ワルツ、タンゴなどとは分けた教育方法であったが、そのステップは、ワルツに関係するものが多く、基礎練習にワルツが関わっていく素地が見受けられる。

第2段階 『三〇年型社交ダンスの手引』(1930)では、基礎練習を減少させていく。そしてこれらの基礎練習の後に、ワルツの練習へ入るのである。

第3段階 『モダン社交ダンス』(1931) (V. シルヴェスタ原著／玉置真吉訳補)では、原著がフォックス・トロットから社交ダンスの説明をしていることに対して、玉置はワルツから学んだ方が日本人には合っているとの配慮を行い、ワルツによる基礎練習を述べている。

(2) 玉置式社交ダンス教育体系

『モダン社交ダンス』は改訂され、版を重ねる。最後の改訂である改訂8番目の『新編 モダン社交ダンス』(1959)により玉置の教育体系は完成した。これは、社交ダンスを独習する人のため教

材の配列が意識され、書かれている。内容は、理論と種目から成り立つ。理論は、25項目あり、1. 導入 2. 基本姿勢 3. 基本規則 4. 組んで踊るための規則、5. 音楽 6. ダンスの組立て方の6つの要素にまとめられる。種目は主に、1. ワルツ 2. スロウ・フォックス・トロット 3. クイック・ステップ 4. タンゴ について述べている。

(3) 玉置式社交ダンス教育体系の特徴

玉置はイングリッシュ・スタイルの社交ダンスを正確に踊ることを求めた。そして著作の中で社交ダンスを公式として捉えている(表参照)。

表 社交ダンスの公式(玉置 1931:43)

ダンスの公式—	(1) 直行 (イ) 前進 (ロ) 後退
	(2) 横行 (ハ) 右側 (ニ) 左側
	(3) 回転 (ホ) 右廻 (ヘ) 左廻

玉置はワルツの基礎ステップは簡単であるが、奥深く決して踊りやすいとは言えない、と捉えながらもワルツによる基礎練習を選択した。その理由として①音楽に関して、ワルツは1拍に1歩を原則とし、1拍目が強く聞き分けやすい。従って踵から強く踏み出すことが出来、イングリッシュ・スタイルの自然な動きを習得しやすい。更に、耳馴染みという点においても、フォックス・トロットよりもワルツの方が当時の日本人には受け入れやすいと判断したと考えられる。②フォックス・トロットが大きく移動を伴う踊りに対して、ワルツフォームという4角形は、小さな移動であり、これにより玉置の「公式」の(1)(2)を得ることができる。③ワルツフォームに回転を加えたクォーター・ターンを踊ることにより、「公式」(3)を得られる。即ちワルツは玉置の理論を理解するための基幹的項目を全て備えていると言えるのである。またワルツを踊ることにより、玉置の言う理論の項目をも同時に理解でき、他の種目をも踊ることが出来るようになることを確信したことによるのであった。

Ⅲ. 結論

英国では、フォックス・トロットの習得から始められるのに対して、ワルツの習得を基礎とした指導法が玉置独自の教育体系の特徴となり、著作を多く出版する。著作では特に玉置独自の日本人向けの注や表記の考案がされ、イングリッシュ・スタイルをもとにした玉置式教育体系として確立する。玉置の教育体系は特に著作を通じて一般へ普及され、日本において社交ダンスは、イングリッシュ・スタイルであり、その練習の初めはワルツからという認識を広めるに至っている。

〔主要参考文献〕

- 玉置真吉 1928 『社交ダンスの仕方』凡人社
玉置真吉 1930 『三〇年型社交ダンスの手引』誠文堂(十銭文庫4)
V. シルヴェスタ原著／玉置真吉訳補 1931 『モダン社交ダンス』四六書院
玉置真吉 1959 『新編 モダン社交ダンス』楽友社